

# 甘櫛丘東麓遺跡の調査

—第151次

## 1 調査の概要

甘櫛丘は飛鳥川西岸に広がる丘陵で、現在は国営飛鳥歴史公園として整備されている。調査地は丘陵の東に入り込む谷のひとつで、約6,000㎡の平坦地が広がる。1994年度に谷の入口で駐車場建設に伴う調査がおこなわれ、焼土層を確認した。焼土層からは7世紀中頃の土器、壁土、炭が出土し、『日本書紀』に記載された蘇我氏の邸宅との関連が指摘された（『藤原概報25』）。

2005年度には公園整備に伴う発掘調査をおこなった。谷を埋め立てる整地や7世紀の掘立柱建物群を検出し、あらためて蘇我氏邸宅との関連が問題となった（『紀要2006』）。さらに2006年度から継続的な学術調査を開始した。石垣、掘立柱建物、塀、炉、溝などを確認し、谷が7世紀を通じて利用されている状況を明らかにした（『紀要2007』）。今年度の調査区は昨年度の調査区に隣接し、谷の奥にあたる。調査面積は950㎡、期間は2007年11月12日～2008年4月28日である。

## 2 調査の成果

新たに7世紀の掘立柱建物3棟、塀、土坑、溝などを確認した。建物のうち1棟は桁行5間、梁行3間の総柱建物である。また、調査区東北隅で検出した土坑から多量の須恵器と土師器が出土した。土器の年代は飛鳥Ⅱ初頭に位置づけられる。土坑は昨年度の調査で検出した総柱建物SB120の柱穴を壊しており、建物の廃絶年代が7世紀中頃以前であることが判明した。

なお、昨年度の調査では、遺構の年代をⅠ期（7世紀前半）、Ⅱ期（7世紀中頃～後半）、Ⅲ期（7世紀末頃）に区分している。今年度の調査区内には、Ⅰ期の建物が3棟、Ⅱ期の建物が3棟以上存在する。Ⅰ期の建物が谷の奥に広がることが明らかになり、それらが蘇我氏の邸宅と関連する可能性が高まった。今後は大型建物や居住空間の有無が問題となり、谷の中心部や入口付近の調査がさらに重要性を増した。

一方、7世紀後半の掘立柱建物群はコ字形の区画塀によって囲まれている。建物群の性格と全体像の解明という新たな問題が提起された。（豊島直博）



図138 第151次調査区全景（北東から）